（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　　畠山　　寛

本論文は、ドイツ文学史上、おそらく最大の詩人の一人であり、文学のみならず、後世の哲学、思想にも大きな影響を与えたフリードリヒ・ヘルダーリン（Friedrich Hölderlin, 1770-1843）の、なかんずく後期詩篇を主たる対象にして、その哲学・美学論文をも適宜参照しつつ、詩行の構造を独自の視点から分析し、解明したものである。

著者は、ヘルダーリンの詩作品の根柢に、現在が「夜の時代」であるという歴史認識が存することを指摘する。神々が、聖なるものが、去った時代であるからこそ、それを語る言葉には、乏しさ、欠如が刻印されざるをえない。それは、それぞれの詩語の意味内容もさることながら、その形態、構造、なかんずく作用、運動、機能においてこそ、如実に露呈されることになる。すなわち、詩語のありようそのものに、その歴史性が現象しているというのである。そうした詩作品を解釈するにあたって、著者は、いたずらに観念的な言辞を弄することなく、詩語に見られる文法的な範疇それぞれの詩的機能を分析することによって、緻密な考察をくりひろげていく。固有名詞と抽象名詞、比較級と最上級、ダイクシス、時制といった項目において、順次、明らかにされていくのは、ヘルダーリンの詩語がそれぞれにはらんでいる、聖なるもの、絶対的なるものへの志向であるとともに、またそうした志向が挫折することによって、その都度、そこに露呈される破砕面であり、すなわち一定の歴史的局面にほかならない。かえりみれば、このヘルダーリンの詩行の特異さは、古くは最初の歴史的批判版全集の編纂者であるノルベルト・フォン・ヘリングラートが「生硬な結合」と形容し、ついでヴァルター・ベンヤミンが「中間休止」によって「逐語」化されるテクスチュアとして敷衍し、さらにはテーオドール・W・アドルノが「パラタクシス」、すなわち並列構文として特徴づけたところのものであった。こうした解釈史、受容史を、もとより著者は顧慮しつつ、そうして看取されたヘルダーリンの詩作品の構造を、テクストとして静的に提示されている場から、それが作用し、機能する場へと展開させようとするのである。その意図は、十分な成果をあげているということができる。

ヘルダーリンの後期詩篇の構造を、文法的なカテゴリーに即して分析する、こうした方法は、きわめて独創的なものであり、これまで、ごく部分的にしかなされてこなかった。ディテールにおいて犀利な解釈をくわえるばかりか、それらをしかるべく位置づけ、これほどまでに総合的に展開しえた研究は、ドイツ語圏においても類例をみない。

本論文は、ときとして直観力の鋭さを恃むあまり、推論を急ぎすぎる憾みなしとしないが、参考文献を博捜しつつ、著者がいうところのヘルダーリンの「詩文法」を再構成しえた力量は、十分に評価されるべきものである。以上に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。